

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



夏です。祭りの季節です。
大阪天神祭りの地車講蛇おどり

アルパック ニュースレター もくじ

- ・女性の博多祇園山笠 2
- ・大阪のまつり——天神さんと船渡御 4
- ・活性化への岐路に立つ竹富島 5
- ・祭りの前後 7
- ・「現代版楽市楽座」 「長浜楽市」 7
- ・立命館中学・高校移転新築 8
- ・お米屋さんのはかわる 9
- ・新人紹介 11
- ・うまいもの通信③からしめんたいのルーツ 13
- ・ネットワーク④コーヒー一杯の勉強会
 - ・SAS 名古屋 14
- ・旧刊新刊書評紹介「農家に嫁がやってくる」 15
- ・まちかど 16

NO. **31**

女性の博多祇園山笠

伊集院 豊磨

博多山笠の歩み

7月になると「オッシュョイ」、「オッシュョイ」の掛声がひびき、山笠が博多の街に夏を上げます。この博多祇園山笠の起源には諸説があります。941年説、1241年説、1432年説と、様々ないわれがありますが、いずれにしても数百年の歴史を持つ博多の祭りです。この数百年の歴史の中で、明治の文明開化の時代、そして昭和20年の大空襲と幾度となく中断しながらも復活し、今、山笠は百万都市の祭として繁栄しています。

男の袷舞台、山笠

山笠を男の祭としてみると、その運営は、「流れ」が祭を運営し、この「流れ」は厳しい序列で統制されています。取締(1人)、赤手拭(3~4人)、若者組(数十人)の序列があり、年齢の上下や貧富の差には無関係に、山笠への参加年数が物を言う社会が形成されています。台上(だいががり)の若者頭、そして、赤手拭(あかてぬぐい)、になることは、名誉なことであり、男性にとってあこがれの姿です。

女性が支える舞台裏

山笠の15日間(7/1~7/15)、博多の大黒流れかき山



男性は「山のぼせ」(山笠に夢中)になり、商売も家庭のこともすべてわすれて山笠にかかりきりとなり、店や家庭は女性の肩にまかされ、山笠は女性によって支えられているとも言えます。

かき山七流のひとつ「大黒流れ」60年間裏方をしてきた方に話を聞く機会に恵まれました。

6月になると、家庭での山笠用具の手入れが始まり、子供の水ハッピーが小さくなっていないか、ハチ巻きは、腹巻きは、ノ込み(しめこみ)はと、家から山笠に出る男達の「装束」の改めに忙しい日々となります。

かき山が博多の街を走る祭の後半は特に忙しくなり、家庭では男性の水ハッピーやしめ込みの洗たくに追われ、一方では流れの直会(なおらい)のたき出しの準備でテンテコ舞いの日々となります。

直会(なおらい)

かき山をかついで走った男達が流れの山笠詰所で冷えたビールでのどをうるおし、さかなをつまみに祭の話を咲かせることが直会と言われており、その準備をするのが「流れ」に参加している家庭の婦人の役割りとなって

直会(なおらい)



います。

昔は女人禁制で、設営、準備、接待等は全て男性の若者の仕事であったそうですが、今は女性に直会の準備をまかされており、「不浄の者立入るべからず」の意味が変わってきているとのこと。

その昔も、女性が詰め所に入らなかったけれども、ごはん（おにぎり）は各家庭で女性が準備し、若者が一軒一軒を回って、ごはんを集めていたとのことですので、やはり女性の力が裏方をつとめていたようです。

「忙しい、忙しいとは言うけれども、それが苦にならない」。「7月14日の夜はお客が多くて、この60年間寝たことがないし、15日の追山（おいやま）は一回も見たことがない」、「15日が終わると高枕していいと言って、昼寝をしていいことになっている」「女も山笠を待っている」との言葉が特に印象に残りました。

男性に聞くと「男は遊んでいるだけ」、「男は女がいるから山のぼせになる」、「台上り（だいがり）になったところは女性に見てもらいたい」とのことです。

これからも、女性に支えられて「山のぼせ」の血がさわぎ、勇壮な山笠が博多の街を走ることでしょう。

（いじゅういん とよまる）

大黒流れと裏方の女性達



1 番山笠大黒流れ（昭和13年）



山笠実働日程表

十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十一日	十日	九日	#	七月一日
追山笠	流れ昇	集団山見せ	追山馴し	他流れ昇	朝山	流れ昇	汐井取り	飾り山公開	注連卸し
早朝	夕刻	午後	午後	夕刻	早朝	#	夕刻		
● 早晩午前四時五十九分 一番山櫛田入り 山笠のハイライト そして、ファイナル	● 十日に同じ。 ブロック内巡回	● 他流れの発展した姿。福岡部へき入れ（市民の祭り）一番山スタート 午後三時三〇分店屋町丸善前より福岡市庁舎まで 小・中学校校長と知名士、台上り	● 追山の予行練習一番山スタート 午後三時五十九分（櫛田入り）	● 自己の流れ以外を昇き廻る。相互表敬訪問といったところ	● 流れ昇で祝儀山、縁起山とも言う。 （杉壁の中に子供を乗せる）	● 各流れ内を昇き廻る業しい山御興（山笠始動）	● 各流れ宮崎浜でお汐井を取り、櫛田神社参拝（重要なウォーミングアップ）	● 純爛豪華博多の誇り	● 早朝、山笠地域の抜締め ● 当番町は宮崎浜で汐井取り

大阪のまつり——天神さんと船渡御

藤田 武彦

大阪に住むようになって5年になる。天神祭には毎年のように行っていた。天神さんは本祭には100万人以上の人出のある「水の都」大阪最大の祭りである。いつも橋の上からながめているのもせつないので、一度船渡御に乗ってみたいとも思っていた。船渡御というのは、神さんを迎える船のことだが、今は船遊びのようになっている。今回船渡御について「神舁講」の人にきいてみた。

「天神さんというのは何をやっている祭りですか」5年も住んでいてよくわからなかった。「神舁を流して、流れついたところに仮宮を設けて、それをまた天満宮におむかえすることです。」神事としてみるとそういうことだが、「でも船は下流にいてないですね」「地盤沈下が激しくて、船が橋をくぐれなくて、上流に行くことになったんです。」そんなことも知らないのかと思われたようだが、私の目にうつる天神祭が船遊びのようにみえたのもそのためらしかった。

天神祭の船渡御

「あの船に乗るにはどうしたらいいんですか」とたずねてみた。この講では一隻船をしたてているとのことで、一隻には約300人ぐらい乗れるこのことだった。それなら乗れる可能性は大きいなと思ったが、「そのうち200人ぐらいは関係者（講）ですから……。」残りの100人ぐらいを10余りの町内会に分けて一般客を入れるらしかった。「弁当や酒、肴を合わせて1人1万円です。」安いと思った。

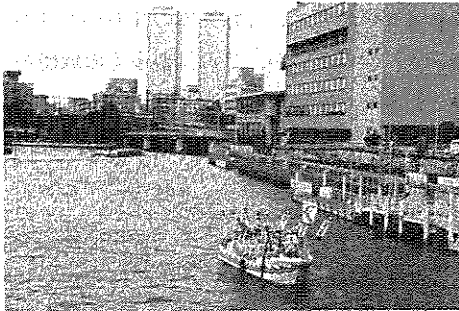
「乗りたい人はたくさんいるのに船はふやさないんですか。」いろいろ話はあるようだがいわれたのは、「地盤沈下で普通の船では上流の橋もくぐれないんですよ。しゅんせつ用の船を改良していますが、その船も少なくなったとか聞いています。」今年はおろか来年もこの様子では船に乗れないかと思った。

さて、話をきいた「神舁講」をはじめとする講について少し補足すると、天神祭は他の祭礼と同様、氏子組織が中心となって運営されている。それ以外に「講社」と呼ばれる組



織もかかわっている。「講社」は普通地縁関係でなりたっていると思われがちだが、天神祭の場合、地縁とは関係が少ない同業者での講社もあるというのが特徴的である。「講社」は祭りのいろいろなパートを分担し、先の「神鉦講」は「鉦流神事」などを担当している地縁的（西天満連合）な「講社」である。どここの大都市部の祭りでもおこっている人口減少も著しく、西天満小学区では1学年1クラスになっているらしかった。別の講社では「み

天神さんの御迎人形船

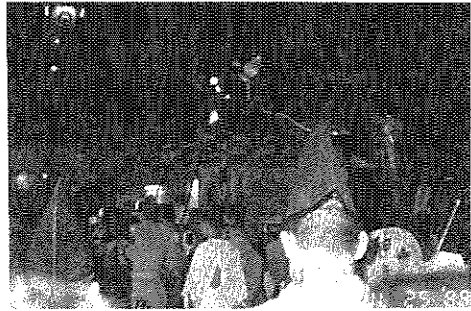


こし」のかつぎ手が少なくなって、別途大学のスポーツクラブに応援を頼んでいるケースも出ているという。しかし、先の船渡御にもみられるように柔軟に今後も対応していくのだろうと思った。

「天神祭」はもう祭りでなくイベントだという人もいる。いろいろ話をきくうちにそう思わないではないが、多分大阪の「天神さん」は心が広いのだろうと勝手に納得した。

（ふじた たけひこ）

宮入りクライマックス



活性化の岐路に立つ竹富島

大河内 雅司

第11回全国町並みゼミが、6月4日～6日に沖縄県八重山郡竹富島において開催されました。

竹富島の町並み景観

竹富島は最も沖縄らしい島であり、沖縄の人々にとっての原風景の島と言われますが、農村集落として、昭和62年に伝統的建築物群保存地区の指定を受けており、(全国で24番目)、農村集落としての選定は珍しく、他に白川郷萩町があるのみです。伝統的な地割りや石垣は、その9割が保存されており、伝統様式を保存した家屋は、約半分が残されています。

竹富島の道には海岸のサンゴの白砂が敷き詰められており、素足で歩くことができ、スコールの後でも水たまりにはなりません。道の両側には家屋の石垣(グスク)がありますが、その足もとには美しい草花が植えられています。以前は道幅は1.5m程度でしたが、島に車が入って来てから4mに広げられました。しかし、信号があるわけではなく、あくまで車より人間が優先されており、安心して歩ける道でした。

伝統的な家屋は、母屋(ウフヤー)と副屋(トウラ、台所)からなり、その周囲には石垣(グスク)が回されています。石垣は、家

屋の基礎工事をした時に掘り出した珊瑚を野積みしたもので、高さが1.5 m程あります。その役目は、強風を遮り、プライバシーを守る他に、かつては、その高さが家の身分を表していたそうです。その入口には目隠し（ヒンプン）がありますが、台風には備えて入口は狭く、一箇所だけです。母屋は概ね5間×5間の正方形で、ほとんどが平屋です。母屋と石垣の間には屋敷林として、福木（フクギ）が巡らされています。家屋の屋根は赤瓦を漆喰で固めた寄せ棟造りで、重量感があり台風でも大丈夫、といった印象を受けます。屋根の正面には、火を食べる伝説の獅子、シーサーが魔除けとして睨みをきかせています。

竹富島の生活

終戦後(昭和30年)この島には、人口1,000人、二百数世帯が住んでいました(終戦直後には2,000人を数えたと言われていました。)しかし、現在(昭和62年)人口307人、内65才以上は112名という過疎化・超高齢化の社会になっています。今年の小学一年生は2人とのことでした。

現在の産業の7割は観光に依存しており、年間の観光客は約10~13万人です。その他の3割は畜産、エビの養殖、養蚕が行われています。

復帰後の沖縄県は、飛躍的に観光県への変貌を遂げ、各地に個性ある集落景観は失われ

全国町並ゼミ



てきました。島外資本の観光開発の進行のなかで、沖縄が誇りとする家づくりの技術と素材は失われてきたのですが、この島はかたくなに、赤瓦と石垣と白砂の集落景観を守り、手作りの持てなしを身上とする民宿の島であり続けました。

活性化への岐路に立つ竹富島

昭和61年には、沖縄の伝統文化と自然環境を、次の世代に豊かに継承するために、島民の総意として「竹富町景観条例」が制定され、続いて62年には全国で24番目の伝建地区に選定されました。これまでのまちづくりが実を結んだのですが、これは数多くの課題を抱えた新たな出発でもあります。

まず、リゾート開発をめぐる課題ですが、開発側の意見は、島にとって観光に代わる産業が見出せない以上、活性化のためにも、地元資本を中心にコントロールされた開発を行うべきである、というものです。対する意見として、活性化のためとはいえ、性急な開発がこの島の社会の秩序に同化できるのか、開発以外の活性化の方策はないのか、といった課題が上げられています。

次に、集落景観の維持における課題があります。過疎化、高齢化による島の活力低下とともに、生活文化の変容(車による道路の拡幅や、石垣島からの送水によって、共同井戸が忘れられた空間になる等)がその背景には

竹富島の町並み



あるのですが、島の集落景観を守ることで意見は一致しても、個別の建て替え・新築での意見が別れています。というのは、イヌマキ、琉球赤瓦、茅、漆喰等の主要素材は自前での調達が難しくなっているのです。例えばイヌマキは西表（イリオモテ）国立公園内にしかなく、入手の困難性、経済性さらには、台風を考えると、コンクリートへの要求が強くなるのは当然のことです。

伝建地区は、上からの強制的な文化財保護

でなく、住民の生活尊重のもとに成立しているものです。この島の場合は特に、本土の集落とは異なった条件が多いことから、集落景観の維持については独自の方法を創造していく必要があります。集落景観を地域社会の共有財産として残し、さらに島の活性化を図って行くためには、いかに経営していくか、という「経営の視点」が求められています。

（おおこうち まさし）

祭りの前後 博多山笠見聞記

尾関 利勝

初めての博多山笠を見てから、かれこれ10年以上になる。そのころは九州事務所を設立したばかりの時で、当時の九州事務所関係者全員で追い山の見物に出掛けたことがあった。

確か夜中の2時ごろまで飾り山笠を見物して飲み歩き、櫛田神社の前にある櫛田旅館に投宿、ほんの一刻仮眠しただけで4時にはもう追い山の見物に出掛けた。

それから4～5年して再度山笠を見る機会があったが、この時は少し仮眠しすぎて追い山に間に合わず、仕方為に各流れの町内を戻って来る山を見に行った。祭りといえば男がかっこよく目立つハレの時だが、しかしそこにも女の力があって成り立っている。各流れの町内では若奥さんたちが追い山から帰ってくる男衆を迎えるべく、ごちそうや酒の用意にかいがいしく働いていた。同様のことを京都の祇園祭りで感じていた。京の祇園祭りは山鉦巡行もよいが、祭りの始めと終わりにある神輿渡しがおもしろい。いなせな若衆が妙に京都らしくなく男っぽく感じられる時だし、参加者は町内・身内ばかりで家族的なところが身近に祭りらしさを感じさせる。博多の祭りには京都に負けない強いコミュニテ

ィーがまだ残っているところを見て、よそ者ながら熱い感動を覚えた。

今回、名古屋と九州の交流研修会を山笠の日に合わせて行った。あの山笠の興奮が忘れられず、つつい研修と称して何人か人に強制して見せる事になったが、結果としては何人かの山笠ファンが増えることになった。三度目の山笠見物は、飾り山笠、追い山、そして祭りの後の宴をフルセットで見ることが出来た。

（おぜき としかつ）

“現代版 楽市楽座”「長浜楽市」

中根 博一

「長浜楽市」は「ツカシン」を創った西武セゾングループが

- ①楽しいコトやモノや情報に、いつもあふれている「現代の楽市楽座」
 - ②人とのふれあい、地域とのつながりを大切に、楽しさのある街
- を基本コンセプトとして滋賀県長浜市で西友を核に創った「街」です。「ツカシン」が、大阪・神戸などの大都市を含む阪神地域の大商圏を対象としているのに対し、「長浜楽市」は立地する滋賀県湖北地方だけではとうてい商売が成り立たず、商圏をいかに広域に拡大するか、そのためにはどういった考え方をしどんな特色をもった施設にすべきかが大きな

課題であったようです。

「長浜楽市」の商圈は滋賀県（全域）・岐阜県（大垣市、不破郡、養老郡）・福井県の約130万人と中京・京阪神の観光客にまで拡げて設定され、6月には来店者が100万人を突破し、福井・岐阜等の広域からの誘客にも成功しているように聞いています。

見学をして感じたことは、施設見学者が多いことや、1グループ1時間の説明会は希望者が多く無料では対応不可能であることなどいつもながらの「話題づくり」のうまさにも感心します。

来店者は「新しい」「変わった」施設ができたので見にゆこうという観光立ち寄りグループ型、アミューズメント施設・飲食等を目的とした若者のデートコース（またはグループ）型、家族で楽しむ遊園地型など、確かに多様な目的で広域の人達が来店しているようですが、西友や専門店が商売になっているのか、ふと疑問を持ちました。

館長さんの話では、今後は旅行エージェンととタイアップして北陸自動車道を行き来する観光バス（1日約千台）が立ち寄れるようにするなど、京阪神と北陸観光の中間に位置する地理的メリットや、長浜の持つ地域観光資源とネットワークを活かした観光拠点施設めざして活動中とのことでした。

量販店としての成功如何については時間を
長浜楽市内部



待たねばなりません、いずれにしろ、地方都市における広域商圈型の商業施設の一つの形を提示しており、注目していきたい施設であるといえます。（なかね ひろかず）

立命館中学・高等学校移転新築

倉本 恒一

立命館中学・高等学校が先程竣工式を向えることが出来ました。この夏休み期間中、先生方は休みを返上し、引越しの作業で汗を流しています。しかし皆どこか喜びを隠しきれない様子です。

先生方にとって長い間の念願であった広いグラウンドのとれる校地への移転と新校舎の完成が実現し、今まで議論を積み重ね形づくって来た新しい教育環境の下での取り組みに一步踏み出したわけです。

新しく出来たホールで一般の人々を対称とするコンサートを開きたいとの申し込みが、外部からすでに来ているとのことでこれも新たな自慢の1つになりそうです。

この喜びは、先生方だけでなく、建設にたずさわった皆のものです。特にこの事業では新しい校地の決定から完成に至るまで、学内での問題や、予算面、工事の技術的問題の解決を合わせて、行政関係や地域の人々の理解と協力を得ることが必須の条件であり、その為に開発許可や工事が難行したことが幾度かありました。

ARPA・Kがこの仕事に係わったのは5年程前で、京都市内や市周辺部を含む移転候補地の調査から入り、この伏見区深草の土地が最優力になるまで約半年かかりました。深草の土地は市街地に隣接し、交通の便も良く、周囲が東山連峰南端の山林に囲まれ、自然環境にめぐまれた土地で約8haの土地が確保出来るということで決まりました。しかし、

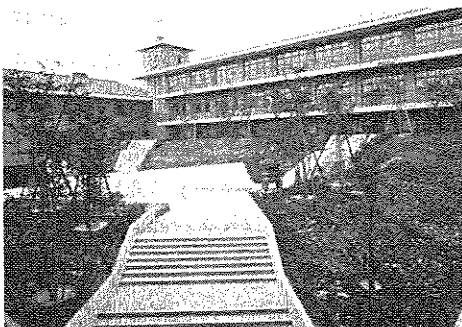
この地が農振地域農用地区域の指定区域であり、それを解除しないと学校が建てられない、というのが最大の問題がありました。

また、この事業では土地を安く押える意味で土地収用法の事業認定を受けられないかということが発想され、京都府下であまり前例がないことでしたが、実現しました。

また、開発に関する規制条件をクリアするのに、地元の同意が必要ですが、この地元の定義がどこまでなのかも問題です。少なくとも駅からの通学に係る区域を限定しただけでも3学区、50近い町内になり、他に各種団体や直接に係る個人を含め200人以上の人との接渉がありました。これらの手続で工事の許可が下るまで2年半、当初予定の63年春開校まで後1年半に迫りました。この間設計も完了し、施工業者も決定し、残りの期間でなんとか完成出来ると思っていましたが、なかなか着工出来ない。それは、工事用道路を市街地を通さず山間部を通す方が問題が少ないと思っていたのが、なかなか地権者や関係者との話し合いが付かなかった為です。こういう時は時間が経つほど「寝た子を起す」様に問題が出て来ます。

それで着工が半年ずれてしまい、やむなく二学期からの開校となりました。幾つものドラマチックなエピソードとして、先生方や工事に係った人々と話しが出来ることが何より

中庭からみた校舎風景



もの喜びです。

(くらもと こういち)

お米屋さんにかわる

高橋 光雅

身近だが縁の薄かったお米屋さん

ARPA・K では数年前から、業界団体の活性化を考える「活路開拓ビジョン調査事業」を手がけてきています。その一つとして、昭和62年度に滋賀県食糧事業共同組合連合会（略称：滋賀食連）が実施した、「お米さんの活性化」があります。

コメというところこそ、コメの輸入自由化論議の中でお米屋さんへの関心が高まっていますが、これまではどちらかというところ、農業問題としてのコメ問題（食糧制度等）が中心だったようです。水道の水を使うのと同じような感覚で、決まったお米屋さんから米を届けよう、商店街を歩いていてもほとんど気にならなかったお米屋さん、この程度の関心しか持たないところから参画した調査ですから、お米さんをめぐる流通と業界のしくみの勉強からスタートしました。

系統別に組織された卸と小売店

食糧制度では、米小売店は原則として一つの卸としか取り引きできないという結びつき登録制度があり、卸と小売との関係は好むと好まざるに関わらず強いものとなっています。

食糧制度による保護と足かせ

昭和17年に制定された食糧制度による政府による米の価格・流通の全面的・直接的管理の米の販売業は、いわば「食糧の配給業」としての性格を強くもっていたわけです。そして、業界にとって食糧制度は、仕入れの中心的役割である品揃えと仕入れ価格の決定面で大きな制約を受けるなどの営業上の「足かせ」であるとともに、一方では登録・許可制

度によって営業が「保護」されるといった二面性を有していたことから保守的傾向の強い業界として推移してきました。

食管制度の緩和と競争原理の導入

ところが、昭和40年代後半から、米の需給の大幅緩和や消費者の良質米志向などを背景として、自主流通米制度の創設、消費者米価の自由化や流通規制の緩和措置（新規参入の開始、ランチ制度の創設、卸直売の実施等）といった食管制度の見直しが進められてきました。これまで無風状態に近かった業界に、スーパーやデパート、生協等が新規参入するとともに、さらに制度の見直しを超えたヤミ流通が増加し、米販売業界における競争が激化してきました。もはや、米は食糧ではなく「商品」となり、業者も配給業ではなく「流通産業」として位置づけられるようになってきました。

「保護」されていたはずの卸・小売業者からヤミ流通に対する取り締まりが叫ばれる一方で、業界の消費者対応と流通近代化が課題とされ、またある意味ではヤミ流通が固定化されそれを追認するような形で食管制度が緩和されるといった経緯がみられます。昭和63年春に出された「米流通改善大綱」においても競争原理の導入が前面に打ち出され、新規参入や営業区域の拡大、許可要件の緩和等が実施されてきています。

このような流れの中で、滋賀食連に結集している卸・小売業者の多くが、「保護」の壁を取り除かれ、自ら法を侵すこともできず、したがって様々な形で残っている規制のみが「足かせ」として作用しているという状況になっています。

活性化のポイント

活路開拓ビジョンではこれまでのように、制度の堅持を主張・要請しながら食管制度の

枠の中で経営を続けていくのか、制度にこだわらずに競争戦線に突入していくのかの選択が、第一のポイントとなりました。議論の中では、これまでの苦勞で得てきた権利を捨て切れないという意見も多くみられましたが、結局、近い将来には米流通が自由化していくという見通しのもとに、従来の経営の仕方にこだわらない、本来の卸・小売業としての機能を発揮していくことを目標とした生き残り戦略を考えていくことになりました。

次に、これまでのように食糧事務所から割り当てられた米を小売へ卸すという流れでは、消費者からも小売店からも満足されない、これからは、消費者サイドのニーズに対応した商品づくり、販売方法を開発していくこと、すなわちマーケットインの発想が必要だということを確認しました。

どの業種でも商品開発が重要です。お米屋さんの場合には、まず良品質玄米の仕入れ力の問題となります。コシヒカリ等のブランド志向が強い現在、組織の大きさ、資本力、取り引き実績等による信用力が仕入れ強化の基本となります。

次に、精米技術による品質管理も重要なポイントです。昔からお米さんは、精米過程での混米操作によって儲けるといわれていますが、同じ玄米でも精米技術によっておいしいお米に仕立てあげることができます。今回の調査事業の中で視察に行った石川県や福井県、徳島県のいずれにおいても、この精米技術の研究開発 — 調質機なるものによる水分の調整（これは味を一定に保つとともに、重量増加によるマジック？も含まれているようですが）、食味値データによる商品開発やそのための設備投資が積極的に行われていました。

さらに、マーケットインの発想を卸・小売

が一体となって実践していくためには、卸自体が、上記のような商品開発とあわせて小売店支援機能（ボランティアチェーン本部機能）を強化していかなければなりません。そこでは、マーチャングアイジング、情報ネットワーク、小売店経営指導、共同販売促進等が主な内容として想定されます。今後のことを考えると難しい面も多いですがその議論に参画した担当者としては、情勢の捉え方や一般的な流通産業のあり方からみたお米屋さんの活性化へのヒントの助言、先進地視察と一緒に行って議論したことなどによって、一石を投じることができたのではないかと思います。また、その波紋が広がっていくことを願っています。

（たかはし みつまさ）

新 人 紹 介

転換期を迎えて

畑中 直樹

私は、今年からARPAとの一員となったので、まず簡単に自己紹介をさせていただきます。私は昭和39年9月18日、横浜生まれですが、1歳半から高校卒業まで福岡の海の中道で育ちました。高校を卒業して、一年大阪で浪人した後、大阪大学工学部環境工学科を卒業して今日に至っています。

高校時代は、ボウズ頭でテニス（硬式）一色の生活でしたが、大学では同好会でラグビー、バンド、車、バイク、テニス（サークルつくってやっていました）、これらを支えるバイト（家庭教師、金属加工、セラミックコーティング等）と世相を反映して、いろんな生活を送りました。そのどれもが印象深いのですが、ここでは車、バイクで走りまわったときみた各地の夜景について、少し書いてみます。

夜景というと、日本では神戸、函館が有名ですが、関西では、京都から国道161号バイパスで琵琶湖へ出るとき、トンネルを抜けて突然広がる夜景、信貴山―生駒スカイラインから見る夜景が特に印象的でした。夜景が美しくみえるのは、あかりの多さもありますが多分明るい部分と暗い部分のコントラストが重要ではないでしょうか。また夜は静かなため、人間の五感がとぎすまされ、ふだんは感じなかったものが加わっているようにもみえます。また夜景に限らず、風景として天気や季節によって表情が移りかわっていくようすを見とどけるのも楽しいことでした。

学生時代は、時間的な余裕が大きくても、お金でしぼられることが多かったですが、会社に入ると時間の制約の方が多くなってくるようです。しかし、機会をみつけて、休日を十分楽しむためにも、いろんなコースをみつけること、穴場探しをしたいと思っています。そうした情報がありましたらお知らせ下さい。

アルパックに入社してほぼ4ヶ月がたちますが、とまどいも大きく、大きな転換期をむかえていると思います。しかし、自分を見失わないよう、自己発展につとめたいと思います。

（はたなか なおき）

不思議の街の“エゾ”リス

鶴飼 奈弓

はじめまして。ARPA・K 新入所員の鶴飼です。4月から京都事務所でお世話になっております。札幌生まれの札幌育ちで、こちらには親類も知人もありません。けれども、小学生の頃から古墳などの遺跡に興味を持ちはじめ、その後何度か足を運ぶうちに奈良や京都、就中飛鳥や斑鳩をはじめとする古の地への憧れがだんだんにつり、大学で建築史を

を学んだ経過もあって、ついに関西系の会社への就職を考えるようになりました。ですからARPA・Kに採用して頂き、京都事務所に配属が決定したときは大変嬉しかったです。

京都との出会いは小学4年のときで、宿泊したホテルが同時に廻った大阪や名古屋のそれに較べて設備・美観、サービスの割にやけに高かったのを子供心に不思議に思ったのを覚えています。その後、修学旅行を含め都合6度程訪れ、延べ1ヶ月くらい滞在しており、くだんのホテルが美しく生まれ変わったのも、大学の友人等との旅行で見えています。しかしながら、居住者としてこの街を観るのは初めてですから、この2ヶ月間は毎日が驚きや発見そして戸惑いの連続でした。

その第一は、何と云っても、きれいな女性の多さです。古今東西を問わずよく言われるように、ミヤコの権力のもとにクニ中から美形が集められ、その子孫が残っていったのが原因なのでしょうか。しかし、300年間将軍のおひざもとであった東京に比べても、美人の割合は高いような気が致します。やはり風土にも依るのかもしれませんが。ある本には「薄暗い町家と高い湿度が色白で瑞々しい肌を造り、肉や魚が高いことと儉約の美風が身体を細くする」とありましたがどうでしょうか……。何れにしましても、まだ配属先が決まらない頃、名古屋出身の友人達に『名古屋なら、お前でも少しはもてるかもしれないゾ』等と言われていた私の展望は脆くも崩れ去ってしまった訳です。くやしいのでついでに一言申し添えますと、殿方にも容姿端麗な方が多いですね。これは、美女が産む子が美しかからかしたら、それとも美しい女性が多いところには自信家の男性が集まってくるからでしょうか。どちらにせよ、思いの外縁の多い街並とともに、目の保養になるところとの感を

一層強く致しました。

このほかにも、不思議な事やわからない事がまだまだ沢山あり、こちらの生活に不慣れな私ですが、皆さんどうぞよろしく願いたします。(うがい なゆみ)

京都の中の自分・自分の中の京都

小原 麻利

地域計画・建築研究所に入社して、早二ヶ月。近況ということでこのニュースレターに筆をとることになったのですが、入社して間もないということで、私の自己紹介を兼ねて社への期待を述べてみたいと思います。

私は同志社大学文学部(美学・芸術学専攻)を卒業し、1年間、建築事務所に勤めた後、京大の三村研究室で都市計画を学び、今年ARPA・Kに入社することとなりました。その中で、なぜ文系の大学を卒業して、建築、都市計画を志したのか、少し異質に思われるでしょう。やはり、自分自身でも納得のいくように希望にそって歩んできたのですが、その意図が最近まで明確になりませんでした。

しかし、ARPA・Kに入社して、それが明らかになりつつあります。

それは、ARPA・Kの環境によって、自分が京都人であるということを自己認識しはじめたからだだと思います。

「京都人は無表情、冷血である」といいます。もちろん私にもそういったところもある



のですが、それは京都は因襲や外界の監視、周囲の中傷や干渉の中で歴史を重ねてきたからでしょう。HOPE計画でも見るように、うなぎの寝床にベンガラ格子、ムシコ窓といった外界シャ断の典型は京都人そのものだと思います。

しかしその反面、京都人の中には先駆者的な意識が強く、それは多くの建築や都市計画にも見ることができます。日本最初の幼稚園、小・中・女子学校、水力発電、市電、インクライン……など近代都市文化を築きあげてきたのです。

その意味でも京都の本質は決して排他的でなく前衛的なものであったといえます。

単純な解釈かもしれませんが、そうした部分が京都にいる自分、自分自身の中にある京都を発見するための糸口となり、京都人であることを自己認識させてくれたのだと思います。大学での専攻も近代美術の前衛であったし、都市計画も生活や空間における前衛だと思っています。

そして今、私はその思いをARPA・Kに期待しがらぼうと思っています。

こんな私ですが京都をはじめとする東京・大阪・名古屋・九州の皆様、どうぞよろしくお願いします。

(こはら まり)

うまいもの通信③
「からしめんたいこ」のルーツ
山辺 真一

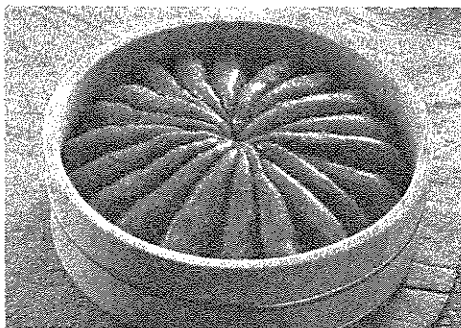
現在「からしめんたい」というと、九州は博多の名産として全国的なブランドとなっています。

もともと、「めんたいこ」という呼び名は、朝鮮語の日本語化したもので、「明太魚子」、「明太子」などと書かれ、一般的には「たらこ」または関東地方では「すけこ」とも言わ

ているようです。「めんたいこ」の親は、「すけとうだら」で、日本では北海道の近海が主産地ですが、現在の全国のめんたいこ生産量の2割程度しかなく、8割近くが韓国や北朝鮮、ソ連、アメリカ等で占められています。

「めんたいこ」は昔から食べられていたのですが、日持ちが良くないこともあって、ほとんどは焼いたものを食べていました。それが生で食べるようになったのは、下関で朝鮮半島との交流が盛んだった頃（明治以降）に、朝鮮からのおみやげ品として日本に持ち込まれるようになってからです。その当時でもやはり焼いて食べる方が多かったようですが、本格的に生で食べるようになるのは、一説には戦後、下関の方で市内に在住する韓国の人々が、自分らの手づくりの「めんたい」を長門市場というところで売り始め、この「めんたい」を日本人の口に合うように商品化して販売したのが始まりと言われています。また博多の方では、これよりも早く、現在ある明太子屋さんが、韓国での経験を生かして日本で販売し始めたのが最初という説もありますが、いずれにしても朝鮮半島が「めんたいこ」のルーツというのは間違いないようです。

しかし、「からしめんたい」が、韓国で商品化されたのは、最近のことだそうで、韓国の食品業者さんが、下関に製造方法を3年ほど前に習いに来られ、その時の話では、韓国からしめんたい



では家庭でつくる習慣があり、それまで商品化がなされていなかったそうです。(やまべ しんいち)

ネットワーク通信④
 コーヒー一杯の勉強会・SAS名古屋
 の紹介 尾関 利勝

からふる・ばわふる・びゅうていふる

ここ数年前から全国で、領域を超えた大人の勉強会が盛んに行なわれている。SAS名古屋もそのひとつで、時々地元の新聞、テレビ、ミニコミ誌の取材を受けたりしている。

このSAS名古屋も一昨年で満10周年を迎えた。SASとはSystems Analyst Societyの略称で、会員は全国的に組織されている。SASの設立はもう20年近く前になり、現在の平松大分県知事がまだ通産省におられた時分に各界の領域を超えて横断的に若い人が日本の現在と将来を考えようと言うところから始まった。この会には中央とか、支部といった組織機構は無く、各地のSASが基本的に同じ趣旨のもとに、それぞれ独自の活動を展開している。毎年夏に全国会議が各地持ち回りでひらかれ、全国から集まった会員が家族づれで時代と地域に関するテーマをもとに交流と親ばくを深めている。

名古屋では、官民・老若・男女約60名の会員がいる。こんな会員の構成を、からふる・ばわふる・びゅうていふると称している。

コーヒー一杯の勉強会

会の集まりは、毎月一回例会と毎週一回分科会(いずれも金曜)を開催している。例会は原則として会員の中から講師を選び、それぞれの専門に係わる裏話や苦労話、取って置きの情報などの講演と討論を中心に進めている。会員だけでは種切れになるので、外部の方にもたった一杯のコーヒーを差し上げるだけで講師をお願いしている。これがみだしの理由。実のところ最近では外部の方の講師の方

が多いのだが、どういう訳か後日会員になる方が多く、結果的には会員が講師をしたと言ったような格好になっている。分科会はヒューマンネットワークづくりを基本テーマとして主にフィールドワークを中心に遊び勉強会を進めている。最近の取組みは、都市と山村の交流の一貫として、長野県八坂村の観光開発を中心とした地域振興計画づくりに参画した。村長さん、企画課長さん、課員さんが早速、具体の人づくり、組織づくりから取組みを始めている。余談だが、ここの「おやき」は素朴で大変うまい。ここには喜太郎が住む民家がある。

無い無い尽くしのSAS名古屋

ところでこの会が10年以上続いている理由は、①遊びか勉強かはともかく、何か面白そうな事に興味深い人間が集まり、②会の運営については規約もなく、研究を目的とせず、物を考える時は固定された殻に閉じこもらず、なるべくお金をかけないなど無い無い尽くしの運営方法を取り、③毎週会員が集まるための場を持ち(会員の事務所を毎週一回無料で使用)、最小限の事務局会員が最小限の準備をすることなどである。SAS名古屋の10年誌にここのところが、詳しくかかっている。インフォーマルな会の運営の秘けつとでも言えようか。詳しく知りたい方は名古屋の尾関までご一報を。(おせき としかつ)

SAS名古屋設立10周年記念フォーラム



旧刊新刊書評紹介

「農家に嫁がやってくる」 —まちづくりも女性の時代

小沢禎一郎 著 農文協
小阪 昌裕

21世紀は「女性の時代」ともいわれているようですが、まちづくりもそのターゲットは「女性」に移りつつあるようです。

今までに過疎のまちづくりをいくつか体験してきましたが、そこでよく組み立てたストーリーの中で、「このままいけば、このまちはどうなるか」といういわば「地獄絵」を描く話をしてきました。その「地獄絵」とは、「このままいけば若者はまちを出て行って帰ってこなくなり、高齢者の割合は高まり、その結果人口が減りまちには活気がなくなります」というものです。

この「若者の数」と「まちの人口」を結びつけるものは何か、これはまさに「子供の数」であり、「女性の数」です。今まで、まちづくりの中で「若者」＝「男性の数」のイメージが強く、「女性の数」までなかなか議論がとどかなかったように思います。

それでは「女性の数」特に「若い女性の数」を増やすにはどうすればいいのか？ つまり過疎のまちに嫁さんがやってくるようにするにはどうしたらいいのか、どんなまちづくりを進めればよいのか、こんな疑問に少なからず相談にのってくれたのがここで御紹介するこの本なのです。

目次をながめただけでも、いろいろ興味深いタイトルがつけられています。例えば、

- 「結婚」が大事なのに — 初デートでふられたケース
- 不潔な男に嫁さんはこない
- 結婚しない女性がふえている
- 女性は男性の決断力と行動力を待っている

○30過ぎても

40過ぎても

結婚する希

望をすてる

な！

等々……………。

この本の結論は、農家の生活ときてくれる息子さん娘さんの生活観とのあい

だにある根本的にちがう点をどう解きほぐしていくかということです。その娘さんの生活観とは、

- ①夫婦ふたりで住みたい
- ②自由に使えるお金がほしい
- ③自分の時間や休みがほしい、その中で趣味を実現したい

いわば、「空間・プライバシー」、「お金」「時間」の3つに言いかえられるものなのです。意外や意外、言ってみればごくごくあたりまえのニーズなのです。

過疎のまちに限らず活気があふれ、魅力いっぱいのもちづくりを提案していく場合、女性のニーズにどう対応していくかが大きく問われているように思います。この本はそういったまちづくりに対する助言はもとより、読者が異なれば人生や家庭づくりに対する助言も含まれているようにも思いました。

(こさか まさひろ)



まちかど

“おこし”の製法を 縁日で発見した

名古屋探検クラブ

名古屋には大小様々な縁日(市)が市内各所に立ちます。いつ、どこで開催されているか総ての縁日を網羅した性格なデータがありません。名古屋の縁日の特色は生鮮食品を売っている縁日が多いことで、開発銀行名古屋支店元開発課長の飯倉さん(現在東京)の推定によると、年間24億円程度の売上があるだろうとのことでした。

日泰寺の縁日は、名古屋でも最大級のもので、主な業種構成は植木・造園関係、生鮮・果実・かん物などの食品関係、駄菓子、軽飲食、衣料・身の回り品、生活雑貨、金物・荒物、がん具などで構成されています。その数凡そ2百店舗は下回らないでしょう。出店者は市内は言うに及ばず、三河方面からも来ているそうです。ここでも高齢化が進んでいて、跡継ぎ問題が出ているという話でした。

日泰寺でおこしの製造・販売の露店を発見しました。タイミングの関係で全工程を見ることは出来ませんでした。仕上げの工程を見ることが出来ました。そこにあった、装備からおおよそその工程を類推出来ました。まず

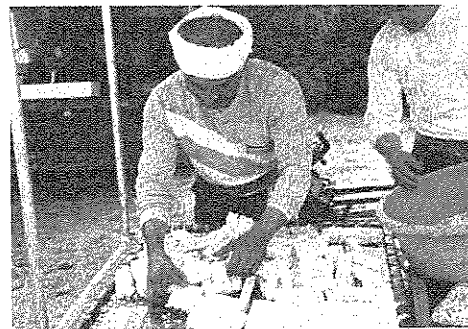
米などの穀類を昔懐かしいバクダンでアメを混ぜながら膨張させ、熱いうちに1m四方位の板に木ゴテで平らに慣らし、これに木の定規を当てて包丁で立て横に切っていくと出来上がりです。いとも簡単におこしを作っていくおじさんの手さばきをしばらく見とれていました。

名古屋事務所では5月から探検クラブを始めました。これまでに覚王山・城山界わい、大須界わい(2回)、安城の七夕祭りをテーマに町を見ながら歩いています。

おこしの切りとり



おこしの完成



ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代)
京都事務所			FAX (075) 256-1764
大阪事務所	〒540	大阪市東区石町1丁目1番地 (天満橋千代田ビル2号館)	TEL (06) 942-5732(代)
			FAX (06) 941-7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル6階)	TEL (052) 962-1224(代)
			FAX (052) 962-1225
東京事務所	〒402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代)
			FAX (03) 437-3407
九州地域計画 研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代)
			FAX (092) 731-7673